

第二十五 日本言語の起源および

變遷のあらまし

文學博士 物 集 高 見

我が徒、皇國人の、今日用ふる語は、我が徒の祖先より傳へ來たる語にて、祖先はいづくよりか齋らし來にけん、古傳を考ふるに、天孫瓊々杵尊は、高天原より天降り給ひきといひ、皇國人の祖先の中には、天孫に供奉して、降りしもありといひ、天孫より以前は、素盞鳴尊も、高天原より降り給ひきといへば、やがて高天原よりや齋らし來にけん、さはいへ、素盞鳴尊の天降り給ひし時はやう出雲國に、大山祇神といふ

あり、瓊々杵尊の天降り給ひし時にも、日向國に大鉗、小鉗などいふ人ありしを思へば、この國のそのかみはやう無人嶋ならざりしは、知らるゝなり、その無人嶋ならざりしをし知れば、またその人口の大概をも推しはかりつべし、成務天皇の國造をおかれし時の戸數より推して、當時を考ふれば、少くとも十餘萬人よりは下るべからず、されば當時この國に住めりし土人は、天降り給ひし天神たちよりは、その數おほかりしは疑ふべからず、果して土人の天神たちよりも、その數おほしとする時は、齊語を學ぶ楚人の如く、有數は無數に化せらるゝ道理にて、天神たち御自らは學び給はずとも、年をつみ、世をかさぬるに従ひ、御子孫の神たちに至りては、いつしか土語にぞ移り給ひなまし、されば我が徒皇國人の祖先の中には、たとひ高天原より天降りしが有りしにもせよ、その齋らし、天上語は、多くはその當時若くはその後に失ひ果て、子孫へと傳へしものは、新たに得たりし、この土語にこそは有りけめ、さればその土語は、すなはち我が徒の今日に傳へ來たる國語の、純粹なるものにして、祖先よりも先だちて、はやくこの國にありしものなり、あはれその土語よ、いづくよりいかにしてか得たりけん、當時土人の各部落のさまを思ふに、これかれみな一樣の語

をもて、散在せりとおぼしくて、大國主神素盞鳴尊の曾孫の、山陰道、北陸道などをはじめて、國中をあるき給ひしにも、語の障りありしさまには見へず、殊に吉野の國標の如きは、各部落と交通せずして、九百餘年を経たりといへども、言語のありさま、他の部落と異ならざりき、また後世の物なれども、萬葉集にのせたる諸國人の歌、風土記に見えたる諸國人の語など、これかれ、すべて同じ語なるを思へば、當時各部落に散在せる土人も、太古いづれの世にかは、知られねども、最初は必一處に群居せしに、相違なかるべし、さるはその群居せし地よ、いづくなるべき、この國の一地方か、はた海外の一地方か、古傳もなく、古書もなければ、今にして知るよしなけれど、海外人の漂流し來れりといふはあらず、若し海外より來れりといはゞ、今なほ海外諸國に、同じ語を用ふる國ありて、且その國の、この國よりも、疾く開けたる證據なかるべからず、然れども未だ、さる國の聞えぬからは、太古草昧の世に、群居せし地は、この國にして、群居せし土人は、この國に發生せりと言はざるべからず、既に土人を、この國に發生せりといはゞ、その言語も推しはかるべし、日本語のそのかみは、右に述べしが如くなれども、その世々を経て、今日に傳はり來

にけるさまは、如何といふに、語は口によりて傳はりゆくものなれば、正しくだに呼びもてゆかば幾萬年を経ぬといふとも、猶太古を、さながらにして、傳へ得べきが如くなれども、人事は言語の上のみならず、何かにつけて、變りゆくが常なるをもて語を呼ぶ聲をはじめて、いにしへは有りしが、今は無くなりしもあり、いにしへには無かりしが、今は出來たるもあり、かの五十連音の也行のイエ、和行のウの如きも、いにしへには有りしなれども、今は通音と、動詞の活用の上によりて、纔かにその也行、和行なるを知るのみにて、發音の上にては、あらはるゝ事なく、殊に也行のイの如きは、奈良よりも以前、既にはやく亡びたりとおぼしくて、古事記には、イの假字に、たゝ伊字ひとつを用ひたり、また延暦の遷都の後に出來たりといふ、伊呂波歌といふものには、也行のイエと、和行のウとを省きたるを見れば、その頃には、既にこの三個の聲は無りしなるべし、されど當時は猶その伊呂波四十七字の聲には、關くるもの無かりしならめど、今はまた阿行のエオと、和行のエヲとは、互ひに紛れあひて、呼びわくるに由なく、纔かに文字の上の目じるしに止まれば、伊呂波歌の出來しより後に、またこの二個を失ひたるなり、この二個は、全國を通じて、失ひたるものにて、この他

にも、東國にては、イとエエとを混すといひ、北國にては、エを、ヨの如く呼ぶといひ、出雲人は、ヒの聲を呼び得ずといふ類、または濁音のジヂ、ズヅの紛れなどを數へ舉げば、既に失ひたるもの今既に失はんとするものなど、猶これ多かるべきが、これは今のみ然るにあらずして、將來も亦斯の如くなるべし、さるは斯くいにしへに有りし聲の、漸く失せゆくに隨ひては、またいにしへに無かりし聲の、新たに出來るもあり、濁音はいにしへは、語の頭に用ふること無かりしに、今は呼ぶもの多く、殊に半濁音の如きはいにしへは、語の中下にも、呼ぶこと無かりしに、今は語の頭にさへ呼ぶもの多し、またいにしへは、拗音は直音につゞめ呼ぶならひなりしが、今は直音につゞめざるのみならず、拗音は却て直音よりも多きが如し、語を呼ぶ聲だにも、既に斯く時々、變りゆけば、まして聲をもて呼ぶ語のいにしへ今と變りゆくは、固より自然のことわりなるべし、今日言文のいまだ一致に至らずして、人みな古文を學ぶが爲めに、古文の口調になれて、その文のいたく今文と異なるを、感せずと雖も、もし古文を學ばざる人ありて、七八百年若くは千年以前の古書を讀みて、イモジ、イモヒ、マガハ、マカゲ、ミソウヅ、ミカハヤウドなどの語を見れば、如何なるべきぞ、今、オトウトとい

ふは弟をのみいへども、いにしへは、兄をもオトウトと呼びたることあり、今はイモウトといふは、女弟をのみいへども、いにしへは、女兄をも、イモウトと呼びたることあり、これいにしへは、一語の中に、長幼男女反對せる、二語の意味を含めたりしにあらずや、猶さかのぼりて、奈良よりあなたの古書を見れば、如何なるべきぞ、イロセ、イロド、イロモ、イロネ、タブサ、タブテ、タグリ、タマヒなどの語にあひて、ますくその奇異なるに驚くべし。

抑語のいにしへ今と變りゆくには、種々の原因あるべしと雖も、殊には新語の出来るに因るなり、試みに古今の語を較べて、その孰れが多きかを見よ、今日の語は、必古語の三倍四倍に至るもあるべし、その増加せしは、悉く新語にして、古來漸くに出來たるものなり、新語の斯く漸くに出來るがために、古來の舊語は、次第く隠れゆきて、後には口語に言ひ出だされざるのみならず、文語にも書き出だされずなりつつ、遂には世ばなれたるかた田舎の方言とはなりはつめり、さてその増加する新語といふは、おほくは新奇なる器物、新奇なる思想に、名づけたる語にして、專らその器物思想につきて、出來たるものなりとは雖も、さらぬも故さらに舊語を改むることあ

り、例へば天はいにしへより、アメといふ語あれども、今はアメとは呼ばずして、テンと呼び、地はいにしへより、ツチといふ語あれども、今はツチとは呼ばずして、チと呼ぶが如し、また蝶はカヒラゴ、葡萄はエビカヅラノミ、餞別はウマノハナムケといへども、常には蝶はテフ、葡萄はブダウ、餞別はセンベツと呼びて、カヒラゴ、エビカヅラノミ、ウマノハナムケなどは、呼ばざるが如し、これ別に同音の語ありて、紛しきがためと、長語の煩しきがためとなれども、一には、前後の新語なるに伴はれて、ことさらに設けたるもあるべし、またその古今によりて、語の變るに、形の變ると意の變るとの別あり、形の變るは、いにしへは、孫をウマゴといひしを、今はマゴと呼び、いにしへは、薔薇をヅバラといひしを、今は、バラと呼ぶ類のごとく、意の變るは、いにしへイヒといひしは、米の蒸したる物なりしが、今は米の煮たるものをいひ、いにしへワタクシといひしは、公に對へて、公ならぬをいひしが、今は語る人自らを呼ぶ類の如し、さてその新語、または他の種々の原因よりして、今日の日本語となりたる語の、その數千年をわたる間に、如何なる變動を、經たりしかといふに、先づ日本の地形は、東北より、斜めに西南に連りて、北は蝦夷島に近く、西は三韓、即ち今の朝鮮に近きをもつて

此れより住くも、彼れより來るも、最もその便利なりしを知るべし、さればにや、三韓との往來は、はやう神代より開けたりとおぼしくて、はやう素盞鳴尊も、新羅におはせし事あり、また豊前の國には、新羅の神の來住せしもありき、殊に新羅王の子に、天日槍といふものありて、來朝せしが、天日槍の來朝は、日本紀には、垂仁天皇の御時、日槍といふものありて、來朝せしがとあれども、今は掃磨風土記にていふなり、天日槍といふ名よりはじめて、日槍が携へ來たる寶物の名どもの全く日本語に異ならぬを見れば、三韓語は、土人の群居して、未だ散在せざりし以前は、やく日本語に雜れりしを知るべし、またその散在せし後に至りては、常に往來せしを見れば、日本語は、先づ第一に、三韓語と關係せしを知るべし、また蝦夷は、その人種の内地の人種と異なるがごとく、言語も亦内地の言語と同じからぬに、はやく内地に入りて、奥羽の人と雜居せし間、自、その語のまじりしもあるべく、殊に蝦夷に近き地などには、蝦夷人の呼びたる語をもて、名づけたるもあるべし、和漢三才圖會に、蝦夷人も熊はクマ、は蝦夷人が内地の語を學びたるか、内地の人の、蝦夷語を傳へたるされば、日本語は、か、今は知る由なけれど、語のたがひに入りまじれる證にはすべし、はじめ西方にあるは、三韓語に關係し、北方にあるは、蝦夷語に關係したりしが、紀元一千年代、應神天皇の御時に、百濟國より献りし支那の書籍につきて、更に支那語の

入り來たるにあへり、抑當時はじめて支那の書籍を讀みけんさまよ、今にして知るべくはあらねど、今日の讀法をもて思ふに、字音をもて直讀せしにはあらずして、音訓をまじへて轉讀せしが如し、但音訓をまじふといふにも、殊につとめて訓を用ひて、音はたゞ忠孝仁義等の文字の如く、訓の當てがたきに限りしが如し、古來、訓を主、三月の博士の日本紀を講ぜしにも、訓を多く用ひしにても知られ、また菅家の二月も知らる、またその字音を呼ぶにもつとめて日本人の發音に近き、吳音を用ひられたるが如し、吳國は、漢地より、や、日本の發音は、清く、朗らかにして、よく單直の聲を、呼び得るをもて、拗音は、直音にして、呼ぶならひなるに、漢の拗音を、直音されば、いにする時は、吳音となるをもて、吳音の日本の發音に近きを知るべし、にしへより呼び來たる地名、人名、官名、書名等にも、多く吳音を用ひ、古書の假字には、また殊に吳音を用ひたり、さるは後に漢籍を讀むには、漢音を用ふべしとて、音博士をすゑて、漢音を教へられし時にも、猶佛經には、吳音を用ゐられたりき、さてその支那語は、三韓語、蝦夷語をまじへたる日本語中に入りて、最初は讀書の上のみにあらはれて、都の内にありけんが、履仲天皇の御時、諸國に史を置かれし頃よりは、漸く熟して口語にもあらはれ、文語にも用ひられて、偏く地方にも散りけんほどに、一千二

百年の御時、また百濟國より佛像、佛具を献りしにつきて、そこばくの印土語も入り來れり、然れども印土語は、支那を経て渡りし間、その多くは、支那語に翻譯せられしをもて、嚮に支那語の入りしが如くにはあらざりき、當時百濟より獻りし佛像等は、いふ説あれども、その後にも佛經は、支那譯にして、印度の梵文を用ひたるにあらざれば、印度語は、支那語に翻譯せられて、入りたりといふ本論には、障る事なかるべし、然るに紀元一千三百年代より、一千四百年にかけては、三韓人の歸化するもののおほく、支那の人の來朝するもあり、殊に奈良の都になりては、久しく遷都の事も無かりし間、通行の便もひらけて、五畿七道の人、こゝかしこより集り來たりしかば、奈良の都の各地の人をもて繁昌せしが如く、奈良の語も、また各地の語をもて繁昌したり、抑この五畿七道の人といふは、往古團體より散在せしものにて、各地方に散在せし後、そこばくの年所を経たるものなれば、その奈良に入る頃には、訛音をよび訛語を唱へて、奈良人と異なる、一種特異の方言を齎らしたるなるべし、萬葉集に、東歌とての方言にて、詠みたる歌にて、そのかみはや

右は、國初より奈良の頃までの、日本語のあらましなり、なほ奈良よりつぎくに移りかはりたるどもは、他日暇を得ば、また書きつゞくべし、